「茶道文化」教育の教育効果に関する探索的研究Ⅱ

～ホスピタリティと社会人基礎力の経年変化～

Exploratory Study on the Educational Effect of Tea Ceremony Class

- Secular change in positive hospitality mindset and fundamental competencies for working persons -

川原　ゆかり、萩原　宏美、新井　浩之、廣瀬　美由紀、中尾　健一郎、
小浦　康平、座間味　愛理、安徳　勝憲

Ⅰ．はじめに

近年、急速に進むグローバル化や高度情報化は、国際競争の激化をもたらしつつ、我が国の経済社会の構造を大きく変え、高等教育においても教育の質向上の大改革が最重要課題である。高等教育は、社会に出る直前の最後の教育段階であり、学校から社会・職業への移行を見据えた職業・キャリア教育の機会を適切に与えていくことが、より一層重要となっていると言われ、教育改革の柱の一つとして主体的な学びを促すための「アクティブ・ラーニング」がある。アクティブ・ラーニングとは、学修者が能動的に学修することによって、認知力、倫理力、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用能力の育成を図る（文科省・用語集　2012）ことである。

ところで、本学には日本の地域文化伝承の教養教育で、建学の精神を具現化し、ホスピタリティ意識の醸成と汎用能力を高めるための「茶道文化」教育があるが、茶道教育は点前を通して、日本文化の理解を深め、人としての道を究め、我々が忘れかけている基本的な礼儀作法を学ぶ事を基本としており、社会人基礎力の育成を柱にしていると言っても過言ではない。学長は「茶道」とは人としての道を究める総合芸術であると説く。また、本学の学生・教員・職員一丸となった「茶道文化」の教育手法は全国に類を見ないのではないかと自負するところである。

これまで筆者らは、まずは全学共通の必修科目である「茶道文化」の授業を通した教育効果を可視化し、教員間で共通の教育意図や目標をもつことをねらいとして、いくつかの客観指標を用いてその効果検証を行ってきた（川原他、2017）。しかしこれまではデータの蓄積が乏しく、短大の２年間を通した教育効果について十分に検証することが出来なかった。

大学教育の中に職業への移行を支える“汎用力”の育成が一層求められており、教職員が共通の教育目標や到達目標を明確に持つ必要性を認識したところである。

そこで今回は、2006 年に経済産業省が提唱した「社会人基礎力」の可視化を追求した PROG をその指標として着目した。PROG は、リテラシーとコンピテンシーを併せたもので、社会人基礎力の３つのチカラ「考え抜く力（シンキング）」「チームで働く力（チームワーク）」「前に踏み出す力（アクション）」をコンピテンシーの大分類である「対課題基礎力」「対人基礎力」「対自己基礎力」の領域に分けて定義し測定するものである。この社会人基礎力は、日本の企業や産業界が求めるジェネリックスキルとも呼ばれ、大学教育を通したこれらの能力の育成は、学生の卒業後の移行や社会（企業）への適応を目的としたキャリア教育としての役割を担っている。

しかしこの社会人基礎力の概念は､客観的に本学の建学の精神のすべてを客観視したものとは言い難い。よって本研究では、PROG が想定するコンピテンシーの概念を足掛かりとして、「茶道文化」教育に期待する社会人基礎力を再検討する必要があると考える。また、これらの検討プロセス自体が、本学教職員の教育目標を振り返ることに繋がると思われる。

以上のことから本研究では、はじめに社会人基礎力とホスピタリティの概念的な関係性について整理する。次にホスピタリティ尺度と PROG の指標を用いてホスピタリティと社会人基礎力の育成という視点から教育効

果を探求することとし、平成28年度入学生の卒業までの2年間の経年変化を検証する。更に「茶道文化」教育に対する教職員間の意識を捉えるアンケート結果から、今後の課題と展開を示すことを目的とする。

Ⅱ．社会人基礎力とホスピタリティ

そもそも我々が社会の中で自分の能力を生かしながら意欲をもって仕事をしていくためにはどのような能力が必要なのだろう。経済産業省は2006年、これを社会人基礎力と名付け、「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」という三つの力によって構成されているとした。それより3年前、経済協力開発機構（OECD）も、人生の成功と良好な社会を形成するためには①異質の集団の中で交流できる、②自律的に行動できる、③様々なスキルを活用して問題を解決できることが必要であるとして、これをDefinition and Selection of Competencies（DeSeCo）と名付けている。社会人に求められる能力に関するこれら二つの定義は、教育現場におけるキャリア教育の指標として現在使われている。

それでは、社会人基礎力とホスピタリティの関係性を考える前に、ホスピタリティの定義を考えてみたい。いくつかの書物はサービスとホスピタリティを対比させて説明している。しかし、サービスが具体的なヒトの行為を表す言葉であるのに対し、ホスピタリティは何らかの行為を行うヒトと、その行為を受けるヒトとの間に生まれるココロの有様であると考えるため、サービスとホスピタリティという二つの言葉を横ならびにして比較することには違和感を禁じえない。ホスピタリティとは、“相手の立場に立って考え、相手が望んでいることに応えようとすることで相互に満足感を得たり、喜びを共有しようとするココロ”ではなかろうか。残念ながら、先にあげた二つの社会人基礎力の説明文の中には、ホスピタリティと言う単語は出てこない。経済産業省が定めた社会人基礎力の条文から文言を抜き出してつなぎ合わせてみると以下のようになる。

「意見の違いや立場の違いを理解し、自分と周囲の人々や物事の関係性を理解したうえで、多様な人々とともに目的や課題を考え抜く。そして課題の解決に向けたプロセスを明らかにして準備し、一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む」。同様に、DeSEeCoの規定からも以下のようなことが確認できる。

「様々なスキルを活用して自律的に活動し、異質な集団の中で他者とうまく交わることが出来る」。このことから、経済産業省や経済協力開発機構（OECD）が提言している社会人基礎力には、ホスピタリティの概念が色濃く反映されているのではないかと考えられる。

ただしここで注意すべきは、ホスピタリティという言葉が、しばしばホテルや旅館などの観光サービス関連ビジネスに限定されて使われているということである。先に紹介した二つの社会人基礎力が社会人の生活活動全般について規定しているように、ホスピタリティあるいはホスピタリティ精神は私たちの社会生活の全領域において有効なものであり、すべての社会人が備えておかなければならないもので、言い換えれば、ホスピタリティは社会人基礎力の重要な柱の一つであると言えよう。

Ⅲ.「茶道文化」教育を通したホスピタリティの経年変化

Ⅲ－1.「おもいやりの心」アンケートからみたホスピタリティ習得度の変化

平成28年度から本学が運営するポータルサイトで短大生のホスピタリティ習得度を理解することを目的として「おもいやりの心」アンケート を実施している。川原ら（2017）はこの調査結果から「茶道文化」の教育的効果との関連を客観的な評価軸としてホスピタリティ尺度を用い、建学の精神の具現化を検証しようと試みているが、ここでは平成29年度の調査結果と比較をすることでホスピタリティの習得度にどのような変化があったか検討する。

1)「おもいやりの心」アンケート調査の結果

アンケート調査は平成29年度も28年度同様、全25項目で構成されたホスピタリティ尺度を用いて実施している。回答は4件法で求め、点数が高いほどホスピタリティの態度を有していると捉えることができる（詳細は川原ら（2017）を参照）。29年度の調査は平成29年11月から平成30年2月に行われた。調査対象は全学

生であるが、28 年度から 29 年度の経年変化を明らかにするため、調査結果については 28 年度 1 年生、29 年度 2 年調査を対象として、さらに両方の年度で回答をしている 118 名を対象としている。29 年度 2 年在籍者数から見た回答率は 49.2%で、その他回答者の詳細については表 1 に示した。

1「おもいやりの心」アンケートのデータ使用については、本学運営員会にて使用許可を得た。学生にはアンケートの調査結果は、個人ごとにフィードバックする事を伝えた。

表1　回答者について

学科専攻	28年度					29年度					28-29年度		
	在籍者数		回答者数		回答率	在籍者数		回答者数		回答率	回答者数		回答率
	N	%	N	%	%	N	%	N	%	%	N	%	%
食物科栄養士コース	32	14.0	32	14.6	100.0	32	13.3	16	12.4	50.0	15	12.7	46.9
食物科製菓コース	13	5.7	10	4.6	76.9	13	5.4	3	2.3	23.1	3	2.5	23.1
保育学科保育専攻	101	44.3	99	45.2	98.0	103	42.9	34	26.4	33.0	34	28.8	33.0
保育学科介護福祉専攻	16	7.0	15	6.8	93.8	16	6.7	8	6.2	50.0	8	6.8	50.0
国際コミュニケーション学科	60	26.3	59	26.9	98.3	70	29.2	65	50.4	92.9	55	46.6	78.6
専攻科保育専攻	6	2.6	4	1.8	66.7	6	2.5	3	2.3	50.0	3	2.5	50.0
合計	228	100.0	219	100.0	96.1	240	100.0	129	100.0	53.8	118	100.0	49.2

2）ホスピタリティ習得度の分析について

実施したアンケートは自分自身と他者との間に生まれる心象、態度、行為について問う「ホスピタリティ尺度」25 項目で構成されている。これら 25 項目について主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子数については固有値の減衰状況から 28 年度、29 年度ともに 3 因子が妥当と考え、両者を比較することも考慮しながら項目を精査し、最終的に 14 項目 3 因子を抽出した。表 2 は回転後の因子パターンを示している。

表2　ホスピタリティ尺度の因子分析結果（2年間）

	28年度			29年度		
	Ⅰ（α=.717）	Ⅱ（α=.779）	Ⅲ（α=.736）	Ⅰ（α=.798）	Ⅱ（α=.766）	Ⅲ（α=.673）
【自己への充実感・効力感】						
㉑ 気力、体力、意欲において、今の生活に満足している	***.734***	-.004	.062	-.003	***.585***	.105
⑯ これまで充実した人生を送ってきたと思っている	***.653***	-.068	-.009	-.001	***.726***	-.086
① 今の自分の生き方に満足している	***.612***	-.135	-.054	-.093	***.710***	-.045
⑳ 少々のことでは落ち込まない性格である	***.571***	.010	-.050	.040	***.636***	.058
⑥ たいていのことは人並みにやれると思っている	***.465***	.062	-.042	.238	***.408***	-.049
【他者へ開かれた行為】						
⑰ 人の気持ちのちょっとした変化にきづくほうである	-.270	***.837***	-.042	***.796***	-.112	-.020
㉔ 親しみやすい人柄だとよくいわれる	.028	***.730***	-.087	***.775***	.00	-.043
⑲ たいていの人とはうまく付き合える	.210	***.564***	.075	***.660***	.032	.136
⑱ いつも相手より先に挨拶するようにしている	.055	***.538***	.024	***.587***	.011	-.028
⑧ 間違ったことは素直にその場で訂正することができる	.277	***.379***	-.035	***.495***	.190	-.127
【他者受容的態度】						
③ 自分が話すより、相手の話を聴くことのほうが多い	-.139	-.108	***.747***	-.193	-.077	***.649***
⑤ 不平不満の他人にぶちまけることは少ない	.024	-.010	***.746***	.253	-.084	***.522***
② 相手の話題に異論をさしはさまないで聴けるほうである	-.016	.00	***.674***	.007	.021	***.683***
⑩ ふだんイラだっているようなことはあまりない	.192	.237	***.412***	.026	.255	***.450***
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	-	.633	.20	-	.571	.446
Ⅱ		-	.243		-	.319
Ⅲ			-			-

因子抽出法: 主因子法　回転法: ﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

同様の因子分析を試みた川原ら（2017）の研究と因子を構成する項目及び高い負荷量を示した項目が、数の違いはあるがほぼ類似していた。そのため同じ因子名を採用し、第 1 因子を「自己への充実感・効力感」、第 2 因子を「他者に開かれた行為」、第 3 因子を「他者受容的態度」と命名した。3 つの因子が得られたことをふまえて、構成する項目の得点合計し、その平均値を下位尺度得点として算出した。また抽出された 14 項目の得点合計の平均値を「ホスピタリティ得点」として算出した。

①ホスピタリティ習得度の経年差について

因子の下位尺度得点及びホスピタリティ得点について28年度と29年度を比較したものを表3に示した。すべての得点間で有意な差がみられ、28年度から29年度にかけてホスピタリティ習得度が高まっている様子が窺える。3つの因子間では特に「他者に開かれた行為」が1年間で最も高まっているようである。

表4は得点間の相関を年度別に見た結果を示している。両年度ともホスピタリティ得点と3つの下位尺度得点は正の有意な相関がみられた。下位尺度間について28年度は「自己への充実感・効力感」と「他者へ開かれた行為」、「他者へ開かれた行為」と「他者受容的態度」がそれぞれ正の有意な相関がみられた。29年度については3つの下位尺度間相互に正の有意な相関がみられるようになり、自己への充実感・効力感と他者への行為、そして受容的な態度がお互いに影響しあいながら、ホスピタリティが習得された様子が窺える。

表3　各因子の下位尺度得点とホスピタリティ得点の経年比較（全体）

因子名	N	28年度	29年度	t値
【自己への充実感・効力感】	118	2.65（.57）	2.84（.57）	3.59 ***
【他者へ開かれた行為】	118	2.82（.57）	2.93（.57）	2.44 *
【他者受容的態度】	118	2.76（.63）	2.86（.57）	2.18 *
＜ホスピタリティ得点＞	118	2.74（.43）	2.88（.44）	3.63 ***

（　）内は標準偏差　　***p<.001 **p<.01 *p<.05

表4　ホスピタリティ得点と及び下位尺度得点間の相関関係(全体)

	ホスピタリティ得点	充実感・効力感	他者へ開かれた行為	他者受容的態度
＜28年度調査(N=118)＞				
ホスピタリティ得点	−	.778**	.803**	.606**
充実感・効力感		−	.501**	.169
他者へ開かれた行為			−	.225*
他者受容的態度				−
＜29年度調査(N=118)＞				
ホスピタリティ得点	−	.802**	.827**	.675**
充実感・効力感		−	.502**	.297**
他者へ開かれた行為			−	.368**
他者受容的態度				−

***p<.001 **p<.01 *p<.05

②ホスピタリティ習得度の学科差について

表5は学科専攻ごとに下位尺度得点とホスピタリティ得点について28年度と29年度を比較したものである。「自己への充実感・効力感」については、食物科栄養士コース、介護福祉専攻に有意な差がみられた。「他者に開かれた行為」では食物科栄養士コースと食物科製菓コースに有意な差がみられたが、食物科製菓コースは29年度が低下している。「他者受容的態度」については学科専攻間の有意な差はみられなかった。「ホスピタリティ得点」については、食物科栄養士コース、介護福祉専攻、国際コミュニケーション学科で有意な差がみられ、特に食物科栄養士コースが高まっている様子が窺える。

表5　各因子の下位尺度得点とホスピタリティ得点の経年比較（学科専攻別）

因子名	学科専攻	N	28年度	29年度	t値
【自己への充実感・効力感】	食物栄養	15	2.29（.57）	2.69（.63）	2.60 *
	食物製菓	3	2.87（.81）	2.67（.61）	0.66
	保育専攻	34	2.53（.56）	2.72（.62）	1.99
	介護福祉専攻	8	2.65（.37）	2.90（.4）	3.04 *
	国コミ	55	2.81（.54）	2.96（.54）	1.96
	専攻科保育	3	2.67（.76）	2.67（.46）	0.00
【他者へ開かれた行為】	食物栄養	15	2.45（.69）	2.84（.7）	2.82 *
	食物製菓	3	3.20（.53）	2.73（.64）	7.00 *
	保育専攻	34	2.71（.56）	2.73（.53）	0.21
	介護福祉専攻	8	2.83（.47）	3.08（.5）	1.39
	国コミ	55	2.96（.53）	3.07（.53）	1.71
	専攻科保育	3	2.80（.2）	2.93（.7）	0.29
【他者受容的態度】	食物栄養	15	2.95（.41）	3.10（.32）	1.11
	食物製菓	3	2.92（.38）	2.75（.25）	1.00
	保育専攻	34	2.65（.65）	2.65（.5）	0.09
	介護福祉専攻	8	2.66（.79）	2.91（.69）	2.16
	国コミ	55	2.78（.67）	2.91（.63）	1.76
	専攻科保育	3	3.00（.5）	3.25（.25）	0.58
＜ホスピタリティ得点＞	食物栄養	15	2.54（.45）	2.86（.5）	2.61 *
	食物製菓	3	3.00（.45）	2.71（.38）	1.92
	保育専攻	34	2.63（.42）	2.71（.39）	1.16
	介護福祉専攻	8	2.71（.4）	2.96（.43）	4.78 **
	国コミ	55	2.85（.41）	2.98（.44）	2.49 *
	専攻科保育	3	2.81（.46）	2.93（.47）	0.22

（　）内は標準偏差　　***p<.001 **p<.01 *p<.05

③因果関係の検討

表４が示すようにホスピタリティ得点と３つの下位尺度得点の間には有意な相関があることが明らかとなったが、さらに下位尺度がホスピタリティ得点に与える影響について検討するため、それぞれの年度調査ごとに重回帰分析を試み、その結果を表６に示した。

28 年度調査では「自己への充実感・効力感」「他者へ開かれた行為」「他者受容的態度」の３つの下位尺度からからホスピタリティ得点（習得度）に対する影響が有意であった。また、29 年度調査でも同様の結果であった。標準化係数（β）の値から「他者へ開かれた行為」、「他者受容的態度」、「自己への充実感・効力感」の順でホスピタリティ得点（習得度）に影響を与えており、両年度ともこの順位は変わらないが、29 年度は特に「他者へ開かれた行為」の影響が強くなっている様子が窺える。

表6　ホスピタリティ得点と下位尺度の因果関係について（重回帰分析）

	28年度	29年度
	標準化係数(β)	標準化係数(β)
説明変数		
【自己への充実感・効力感】	.319 ***	.264 ***
【他者へ開かれた行為】	.407 ***	.434 ***
【他者受容的態度】	.399 ***	.304 ***
R^2	.674 ***	.610 ***

基準変数：ホスピタリティ得点　　***p<.001 **p<.01 *p<.05

以上のようにホスピタリティ尺度を用いてホスピタリティ習得度の２年間の変化をとらえることを試みた。それぞれの学科専攻で特徴はみられるが、全体的には学生のホスピタリティ得点が向上している様子がみられ、その習得度は高まっているとみられる。そして「自己への充実感・効力感」、「他者に開かれた行為」、「他者受容的態度」の３つの下位尺度がホスピタリティの習得にお互いに影響を与えていることも明らかとなり、特にホスピタリティ全体の習得度の高まりに「他者に開かれた行為」が強い影響を与えていると示唆された。「人の気持ちやちょっとした変化に気づく」「親しみやすい人柄」「たいていの人とうまく付き合える」などこの下

位尺度を構成している項目内容からもホスピタリティの概念に最も近い尺度であり、茶道文化教育を通して習得されるホスピタリティの特徴を示していると考えられる。

Ⅳ.「茶道文化」教育を通したPROGの経年変化

Ⅳ－1. 茶道文化が期待しているPROGの11項目（教育目標・教育効果）の検討

本章では茶道文化の社会人基礎力養成に対する教育的効果について、PROG結果を用いて検証する。

1）PROGについて

短大生活における学生の成長を測定すべく、平成28年度2年生に対し1年次より2年間で計3回のPROGテスト（学修成果可視化テスト）を実施し、各学科の「リテラシー」及び「コンピテンシー」の2側面から、社会に求められる汎用的な能力・態度・志向を測定した。今回の測定に用いたPROGテストのタイミングは、どの学科も概ね1回目(1年次2015年11月)、2回目(2年次2016年4月)、3回目(2年次2017年2月)であった。

2）茶道文化の授業で効果を期待する項目（コンピテンシー項目から抽出）

PROGのコンピテンシーが提唱する3つの基礎力（大分類「対人基礎力」「対自己基礎力」「対課題基礎力」）と9つの要素（中分類）及び、33の詳細要素（小分類）について、茶道文化が教育効果を期待する項目を茶道文化主担当者間で協議した。

協議の結果、茶道文化の授業では「親和力」「協働力」「行動持続力」「実践力」の4つの要素（中分類）が向上することを期待しており、特に11の詳細要素（小分類）の向上を期待していることが整理された。結果を表7に示す。

その後、「気配り」「多様性理解」「人脈形成」「信頼構築」(小分類)の合計を茶道文化の授業で期待する“親和力”（中分類）としてまとめた。以下、“協働力”“行動持続力”“実践力”についても教育意図に沿ってまとめた。

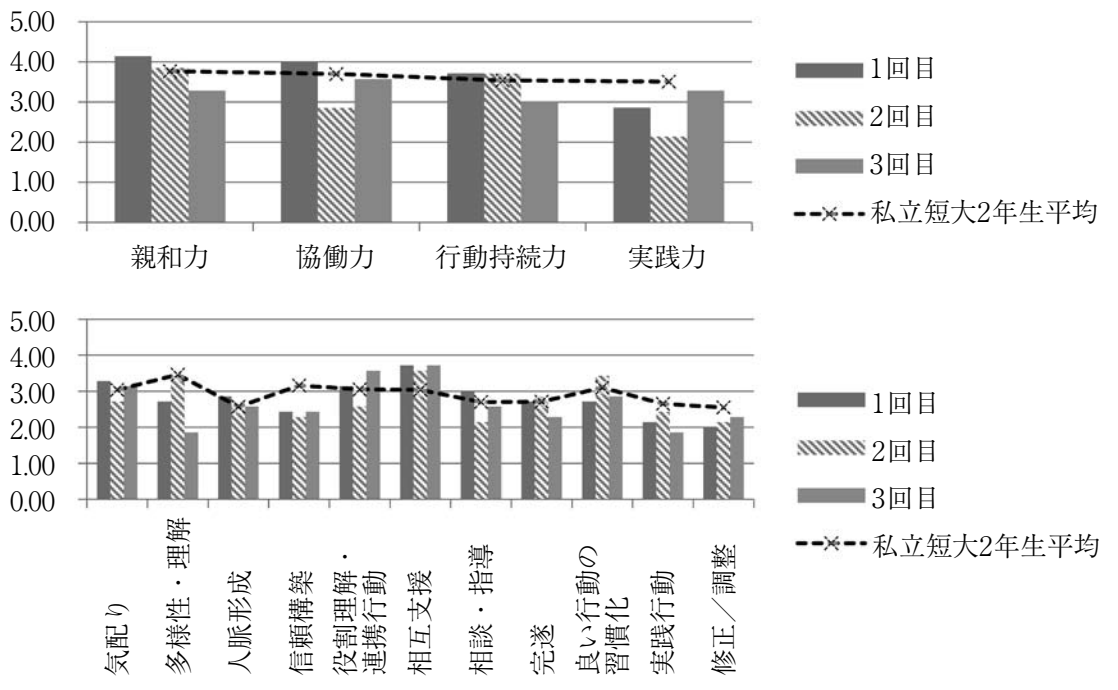
表7　PROGのコンピテンシー下位項目と「茶道文化」が期待する項目の対応

PROGのコンピテンシー項目			「茶道文化」の授業で特に効果を期待する項目	
大分類	中分類	小分類	「茶道文化」教員による分類	
対人基礎力（チームで働く力）	親和力	親しみやすさ		
		対人興味　共感・受容		
		気配り	○	”親和力”
		多様性理解	○	
		人脈形成	○	
		信頼構築	○	
	協働力	情報共有		
		役割理解・連携行動	○	”協働力”
		相互支援	○	
		相談指導・他者の動機づけ	○	
	統率力	話し合う		
		意見を主張する		
		建設的・創造的な討議		
		意見の調整、交渉、説得		
対自己基礎力（前に踏み出す力）	感情制御力	セルフアウェアネス		
		ストレスコーピング		
		ストレスマネージメント		
	自信創出力	独自性理解		
		自己効力感/楽観性		
		学習視点・機会による自己変革		
	行動維持力	主体的行動		
		完遂	○	”行動維持力”
		良い行動の習慣化	○	
対課題基礎力（考え抜く力）	課題発見力	情報収集		
		本質理解		
		原因追及		
	計画立案力	目標設定		
		シナリオ構築		
		計画評価		
		リスク分析		
	実践力	実践行動	○	”実践力”
		修正/調整	○	
		検証/改善		

茶道文化の授業は全学２年間必修の週１コマの授業であるが、各学科においても専門性の高い授業や実習及び学内外での様々な社会活動を行っていることから、社会人基礎力は茶道文化だけで醸成されるものではないことは容易に想像される。しかし茶道文化の授業は計画の段階やシラバスから社会人基礎力の育成に重きを置いている。よって現時点では、明確に茶道文化の授業のみによる効果として捉えることには限界があることを踏まえつつ、一定の教育意図の成果について学科ごとに検討する。その際、比較の材料として、全国私立短大２年生の PROG データを上記の対応表と同様に比較した。

Ⅳ－2. PROGテストから抽出した茶道文化で期待する「社会人基礎力」の各学科間（平均値）比較

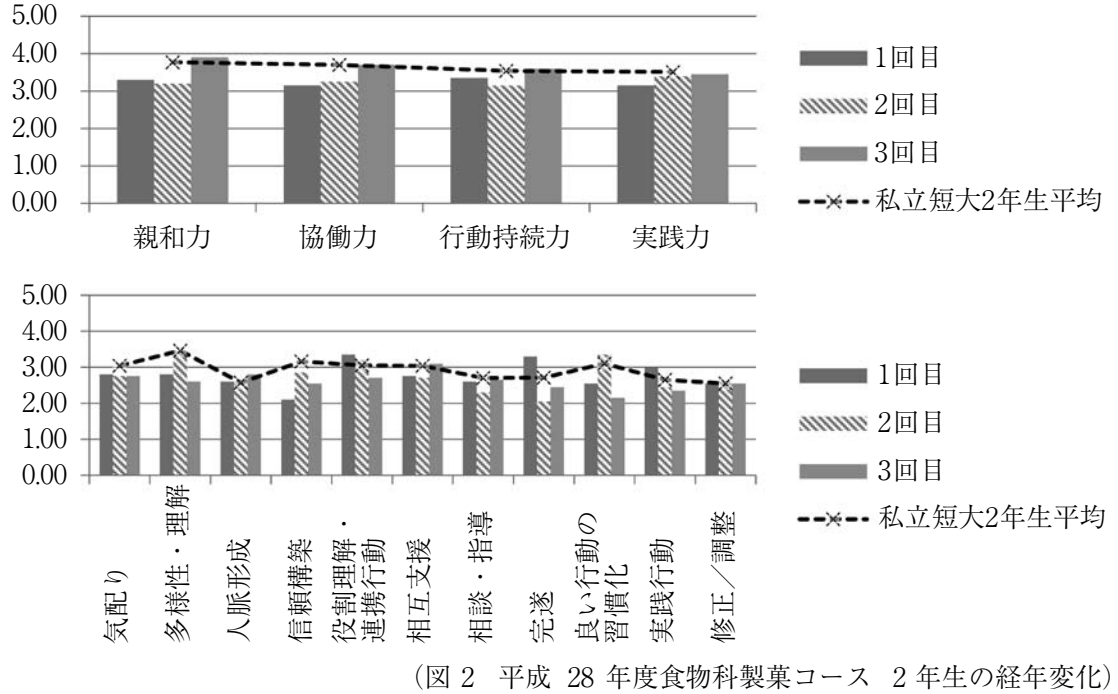
1）平成28年度食物科調理コース2年生の経年変化



（図1　平成 28 年度食物科調理コース　2年生の経年変化）

食物科調理コースの時間の経過と共に向上が見られたのは“実践力”で、課題に対して考え抜き、行動しながら修正を図る姿勢が身についたものと考える。一方、他者を信頼する・信頼されるような働きかけは全国平均よりやや低い傾向であった。本コースは留学生が多数在籍していたことから、学生同士の戸惑いも含めて、信頼関係や多様性理解に対し未熟さを感じていたのではないかと考える。

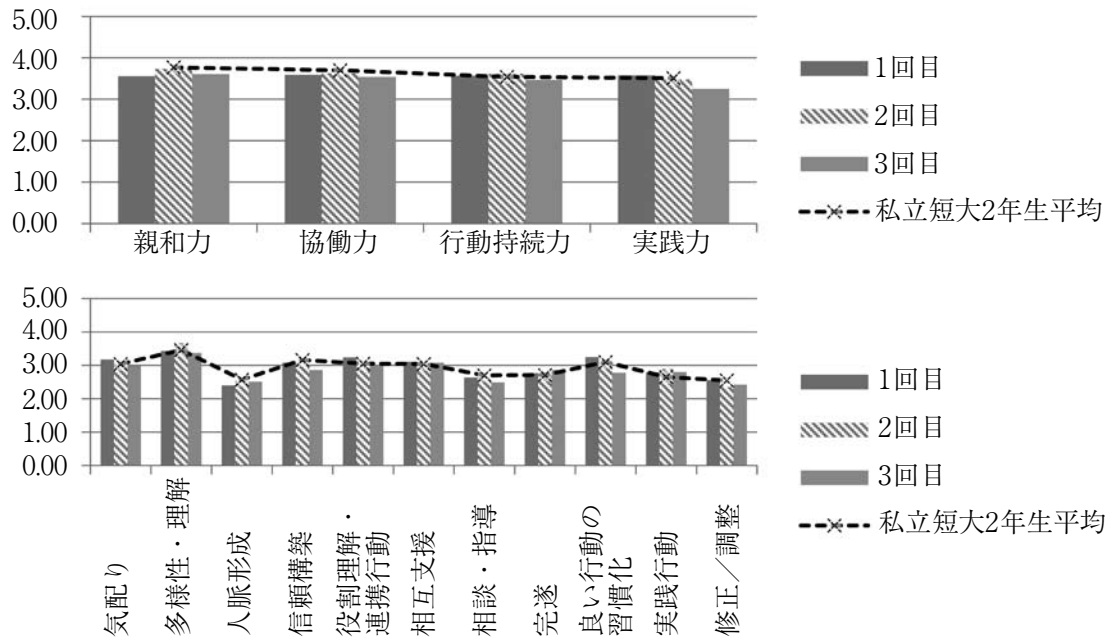
2）平成28年度食物科製菓コース2年生の経年変化



（図2　平成 28 年度食物科製菓コース　2年生の経年変化）

食物科製菓コースでは、中分類の“親和力”・“協働力”・“行動持続力”・“実践力”が1年次から比較的順調に伸び、3回目（2年次）は全国平均の値に近い水準にある。中でも信頼構築や相互支援の伸びが大きい。教員の実感としても、学生は授業に対するモチベーションが高くチームワークも取れた年であった。得点の伸びの背景には、少人数のクラスによる学生同士の交流と教員の丁寧な指導によって相互の信頼構築が促され、学び合いや相互支援が促進されたと考えられる。しかし調理コースとは対照的に役割理解・連携行動や実践行動において数値が徐々に降下していた。また、良い行動の習慣化についても低下が見られる。評価の低下が見られたのは、学生がより高みを求めていった結果、自分たちに厳しい判断を下したのか、もしくはテストに取り組む動機の低下とも考えられた。

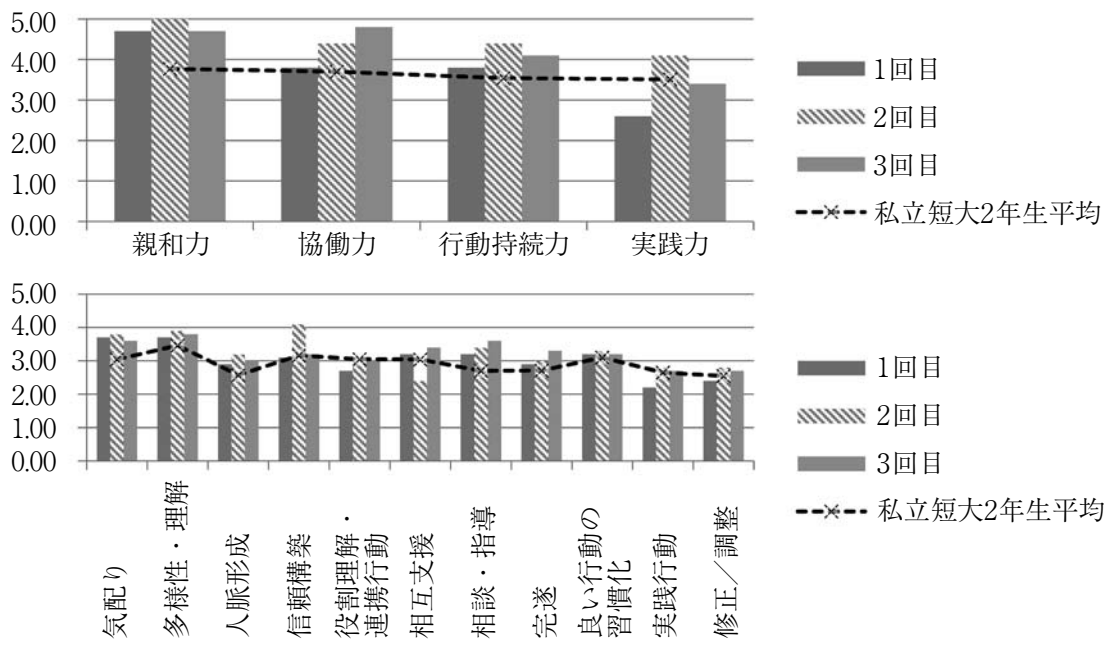
3）平成28年度保育学科保育専攻2年生の経年変化



（図3　平成28年度保育学科保育専攻　2年生の経年変化）

保育専攻においては、入学時には、“親和力”に関連する「人脈形成」がやや低い傾向が見られたが、他学科に比べ2年間での変化やバラつきがあまり見られず、一定の力が維持されているようであった。また、1年次より全国平均と同様の力を有していることが示された。本学保育専攻の特徴として、1学年約100名の学生のおよそ3分の1が同じ高校出身者であるため、保育現場において必要とされる、“親和力”の高さは大きな強みの一つとなっているものと考える。

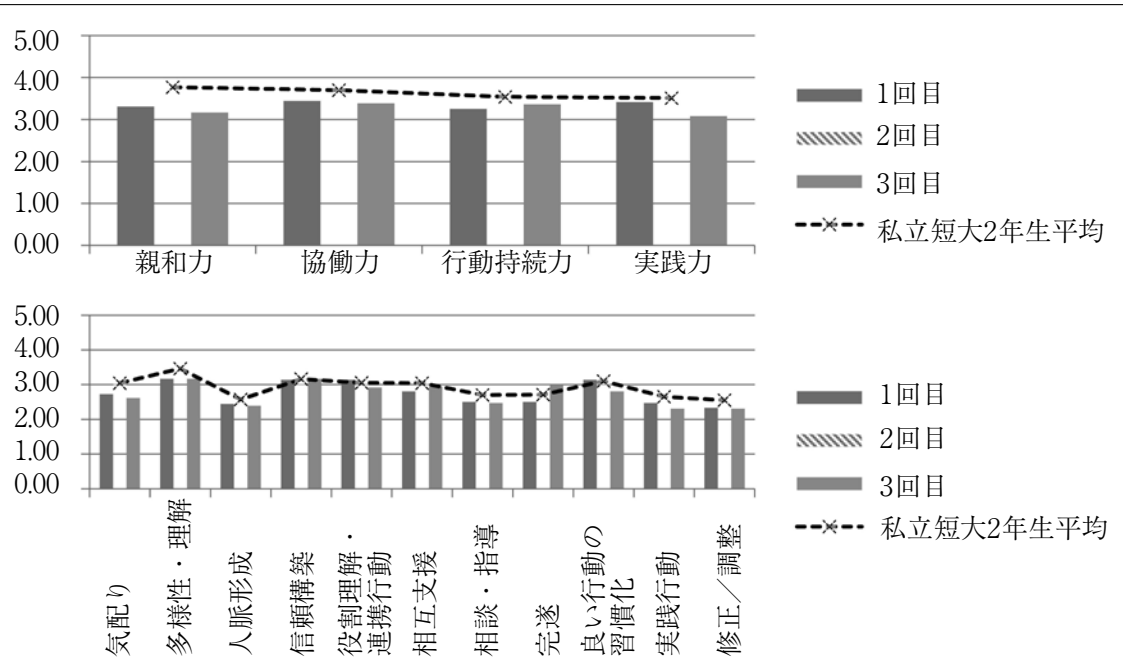
4）平成 28 年度保育学科介護福祉専攻 2 年生の経年変化



（図 4　平成 28 年度保育学科介護福祉専攻 2 年生の経年変化）

介護福祉専攻は学生数が 15 名前後で、社会人の学生も半数近く在籍するため入学当初から全体的に高水準であった。特に親和力は、全国私立短大平均よりもかなり上回っている。更に着目すべきは 2 年間の協働力の伸びであろう。中でも小分類の相互支援、相談指導・他者の動機づけ部分の伸びが大きい。本コースの学生は、2 年間で互いの役割を理解し、励まし合い、助け合う精神を身につけたと推察される。

5）平成 28 年度国際コミュニケーション学科 2 年生の経年変化



（図 5　平成 28 年度国際コミュニケーション学科 2 年生の経年変化）

国際コミュニケーション学科は､2 年間で大きくは変動せず､全国平均をやや下回っている（2 回目は測定データなし)。教員の実感としては学生の成長や伸びは感じられたが、評価が伴わないことについては着目したい。一般的に学生自身の視野が広がるにつれ、自身を客観視して評価が下がることがある。良い行動の習慣化は 1 年次には自信があったようだが、経験の幅が広がるにつれ、自分たちの未熟さに気づいたのではないかと推察される。

※平成 28 年度に食物科を改組し、調理コースを廃止し、栄養士コースを設置。

Ⅴ.「茶道文化」教育に対する教職員間の意識

茶道文化の教育目標についてどのように認識しているか明らかにするために、平成 30 年 2 月 13 日（金）～2 月 20 日(金)の期間に､茶道文化Ⅰ～Ⅳの授業担当者を対象にアンケートを実施した。回答者は 27 名であった。

教職員が茶道文化の授業で重要だと思うことについての結果を表○に示す。回答より、シラバスの内容や授業到達目標について､半数以上の教職員が把握しておらず､また担当者間で共有されていないという認識をもっていることが明らかになった。

表 8.「茶道文化の授業で重要だと思うこと」

質問１.	人数	%
建学の精神の教育	11	41
点前の指導	7	26
礼儀作法（マナーなど）の指導教育	4	15
社会人基礎力の向上	4	15
ホスピタリティ（おもてなし）の精神の醸成	1	4
茶道の歴史	0	0
禅語の教え	0	0

また、学生にとって茶道文化で身につくことについて学年ごとに尋ねたところ下記のような結果であった。

1 年生で身につくこと

表 9.「1 年生で身につくこと」

質問２.	人数	%
礼儀作法（マナーなど）	23	34
ホスピタリティ（おもてなし）の精神の醸成	18	27
建学の精神の教育	10	15
社会人の基礎力の向上	8	12
点前	3	4
茶道の歴史	3	4
禅語の教え	2	3

2年生で身につくこと

表10.「2年生で身につくこと」

質問３.	人数	%
点前	20	24
ホスピタリティ（おもてなし）の精神の醸成	18	22
礼儀作法（マナーなど）	16	19
社会人の基礎力の向上	12	14
建学の精神の教育	9	11
茶道の歴史	4	5
禅語の教え	4	5

以上の事から、以下の2点が課題となっていることが示唆された。

①授業担当者がシラバスの内容や授業の到達目標について十分に理解し共有した上で授業を行っていない

②学生の身に付く能力についても重要であると思う項目と実際に身に付くことの項目間でずれが生じている可能性がある

結果より、授業を担当するにあたって、シラバスの意義や授業の到達目標について共通認識を持つための教職員向けのFD/SDなどが必要だと考えられた。

Ⅵ　総合考察

1）茶道文化教育が担う今日的役割

近年、文科省が強調する社会人基礎力の説明の中に、ホスピタリティと言う単語は出てこないものの、本学の建学の精神を具現化する基幹科目としての「茶道文化」は、日本の地域文化伝承の教養教育でありホスピタリティ意識の醸成と社会人基礎力を土台にした汎用能力を高めるための教育である。

安部直樹理事長は、社会人基礎力と茶道文化の理念を結びつけるにあたりこう述べている。職場や地域で活躍する上で必要となる力は、基礎学力・社会人基礎力・専門知識で、この三つが重なり合って成り立つものであり、当然「茶道文化」の役割は、中心の社会人基礎力にかかわるものである（H 26.8.5 理事長講話）。ここで、「茶道文化」教育の教育目標と社会人基礎力の位置付けが明確化されたところである。

本研究では、PROGが想定するコンピテンシーの概念を足掛かりとして、「茶道文化」教育で期待される社会人基礎力を再検討した。その結果、茶道文化の授業はPROGが定義する社会人基礎力のすべてではなく、“親和力”や“協働力”である対人基礎力に重きを置いて展開されていることが明らかになった。茶道の精神である何時も客を思いやる姿勢や相手との調和を大事にする姿勢は、社会人基礎力の中の対人基礎力の部分を担う教育として概念的に位置付けることが可能であろう。本学の教育の特色は「茶道教育」を柱として「社会人基礎力」を育成し、「ポスピタリティ意識を醸成」し、「建学の精神」へと続き、教育の完成へと向かうのではなかろうか。

2）ホスピタリティの習得度は2年間で向上が認められた

ホスピタリティ尺度を用いたホスピタリティ習得度は、全体的に向上している様子がみられ、その習得度は高まっていた。週1回、2年間で計60回の授業と行事を通して、人や物を大切にし、おもてなしの心を育む「茶道文化」教育の成果は、ホスピタリティ尺度を用いてその伸びを確認することができたと言えよう。

統計的には「自己への充実感・効力感」、「他者に開かれた行為」、「他者受容的態度」の3つの下位尺度がホスピタリティの習得にお互いに影響を与えていることも明らかとなり、特にホスピタリティ全体の習得度の高まりに「他者に開かれた行為」が強い影響を与えていることが示唆された。これより、ホスピタリティの育成においては、他者の気持ちの変化に気づく、親しみやすさなどを心掛ける姿勢から高めていくことが有効であ

ると示された。

3）PROG の結果を用いて学科に特徴的な伸長が確認された

PROG のコンピテンシー項目を、「茶道文化」の教育意図に沿って抜粋し私立短大平均と比較した結果、平成 28 年度においては学科によって特徴的な変化を確認することができた。

特に得点の伸長に着目すれば、食物科調理コースの“実践力”、製菓コースの“親和力”“協働力”、介護福祉コースの相互支援、相談指導・他者の動機づけの伸びが顕著であった。

本研究ではその成果の一部分を客観的に取り上げることができた。今後、「茶道文化」の狙いとする教育目標や、教員間の目的意識の共有化を図る事が必要と考える。

しかしながら、この結果を更に現実的に捉えるならば、全国的なデータと比較することも必要である。大学生 2 万人以上のデータを分析したプログ白書プロジェクト（2016）によれば、小規模大学の方がコンピテンシーの伸長が大きい傾向にあり、中でも対自己基礎力が最も伸長が大きく、次いで対課題基礎力、対人基礎力の順であるという。対人基礎力を構成する「親和力」「協働力」は、大学生段階では伸びが見られにくく、高校までに伸ばすことができる能力として考えられるとしている。つまり、本来であれば高校までに獲得して欲しい対自己基礎力を、本学では大学入学以降に育む必要性を迫られていると読むこともできる。短大教育は確かな対人基礎力を培うこと、社会人基礎力の土台形成の部分を担っていると言えるだろう。

4）「茶道文化」教育に対する教職員間の意識の差

建学の精神を具現化する基幹科目として全教職員協働による「茶道文化」教育を行っている高等教育機関は類を見ない。しかし、専門的な「道」教育であり、全教職員協働教育だからこその難しさがある。教育の方針と枠組みは明確であると思っていたが、実際は授業担当者が教育目標（シラバスの内容の把握）や授業の到達目標についての共通理解が十分ではなく、学生の身に付く能力についても重要であると思う項目と実際に身に付くことの項目間でずれが生じている可能性がある。

結果、授業を担当するにあたって、シラバスの意義や授業の教育目標や到達目標について共通認識を持つことなどが必要だと考えられた。

Ⅴ　今後の課題と展開

本研究の結果を踏まえ、茶道文化の担当者と平成 30 年度の「社会人基礎力　茶道文化Ⅰ」のシラバスの内容を見直し、平成 18 年度に経済産業省から出された 3 つの能力 12 の能力要素を 1 回の授業ごとに意識すべき項目とした。毎回の授業の始めに、学修内容を通して学生に意識してほしい項目を具現化し、教職員とも共通の意識向上が図られることを期待したい。

＜参考文献＞

① 川原ゆかり他（2017）「「茶道文化」教育の教育的効果に関する探索的研究～ホスピタリティに着目して～」長崎短期大学研究紀要第 29 号　pp.1-11
② 株式会社リアセック「ＰＲＯＧ全体傾向報告書（2015 年度）」「ＰＲＯＧ全体傾向報告書（2016 年度）」
③ 松村直樹・平田史昭・角方正幸「新キャリア開発支援論　AI 時代のキャリア自律に向けて」学事出版株式会社
④ 学校法人河合塾・株式会社リアセック「PROG 白書 2016　現代社会をタフに生き抜く新しい学力の育成と評価」学事出版株式会社
⑤ 文科省・用語集 2012

長崎短期大学研究倫理委員会承認【第 1801 号】